

華陽夫人、Who?

— 三国妖婦譚の世界・その一 —

永吉雅夫

(一)

幕末維新の絵師として、ときに最後の浮世絵師と呼ばれることもある月岡芳年に『和漢百物語』というシリーズがある。国芳門下にあつて、兄弟子の芳幾との連作で、その図柄の血まみれの残虐性によって知られる『英名二十八衆句』が慶応二年（一八六六）のこと、これはその前年、慶応元年（一八六五）の作品である。シリーズ名に百物語とあることが示すとおり、日本と漢土を舞台とする怪談を一話ずつ順次、語ってゆくかわりに、一枚の錦絵に展開してゆく。もっとも百話すべてが描かれたわけではないが、中に「華陽夫人」と題された一枚がある（図1）。

なんと言うべきか、見るからに異国的で、だるく熱に

うんだような頹唐たる雰囲気にかめられた画だが、南方を思わせる植物を背景にして、画面中央よりはやや右手に横向きのすらりとした立ち姿を見せている女性、その非情の冷淡そのままにいつそ玲瓏として冷艶である。飛天の羅衣を思わせなくてもない衣裳をまとった彼女の目と指の先には、棒に吊るして樹にかけられた、男の苦悶の表情にゆがんだ首が二つ。そして彼女のもう一方の左手は、やはり目を固くつむり口を大きくあけて悶絶する男の首を、その長く伸ばしてカールした髪をひつつかんで、ぶらさげているのである。華陽夫人、とは、いっ

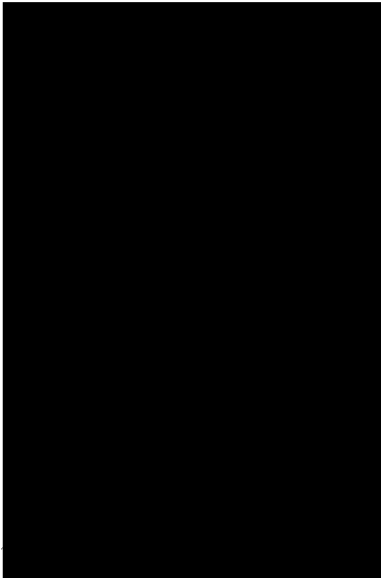


図1

たい誰か。

画中の女性の服装をヨーロッパふうの衣裳らしいと感じ、また男たちの長く伸びてカールした髪に「Canebian」すなわち白色人種を指摘して、幕末という時代とその思潮および芳年の画歴との関連の中で、ここに尊皇攘夷の思想の反映というか寓意を読む見方もあるが、いまここで問題にしたいのは、そういうことではない。もっと描かれたストーリーそのものに関わっている。つまり、芳年が一話の焦点を視覚化すべく描く、この画面を支えている物語の文脈に即した疑問である。華陽夫人とは、なにものか。

画面左上に、「菊葉亭露光」の名前で記された文章がある。町田市立国際版画美術館の所蔵品の解説目録書『和漢百物語——月岡芳年』によって示せば、次のとおりである。

梵国の半俗太非華陽お愛して艶香に反し既に国政をミだす閻浮台を寧魔摩す豈與令にいりて菩戒をさまたぐるものから国民大に患て竟に大乱をこそ引いたり

必ずしもわかりやすい文章ではないが、要するにこれによれば、「梵国の半俗」が彼女を寵愛するあまりに「国政」をないがしろにし、あげくに「大乱」を招くことになったという亡国の美女、それが華陽夫人ということになる。

が、今それはそれとしておいて、ここでひとまず本稿があつかう物語世界の概略を述べておくのが順序というものかも知れない。

たとえば式亭三馬に、「女子小人に覚へ安からんが爲」に事の「起りを大略して。此に記るす」とみずから謳う『玉藻前三国伝記』という作品がある。いま、帝國文庫所収のテキストにしたがって述べれば、「人皇七十六代近衛院の御時。鳥羽法皇の内裏に。玉藻の前といふ宮女」がいて、「寵愛を蒙り。さまざまの怪みを為し」たあげく「阿部泰名」によって「調伏」されるや、「金毛九尾の狐」の正体をあらわし、「那須野の原」にて「三浦上総両介」に退治られて「遂には殺生石」となった。文化六年（一八〇九）に刊行されたこの『玉藻前三国伝記』は、その事の「起りを大略して」記すというのである。すなわち書名が示すように、「唐土」「天竺」「日域」（すなわち日本）の「三国」をそのまま章に立てて、それ

ぞれの空間における物語を略述している。

まず「唐土」において。「殷の紂王」が臣下「蘇護」の娘で「妲己」とて美目よき娘」を召し出し、「妲己が麗はしきに心を溶かし。昼夜寵愛」する。しかし、じつは紂王へ「妲己を奉」る「旅の宿り」で、「金毛九尾の狐」が「密かに窺ひより、妲己が生血を吸ひほして。其儘身体に入替り」紂王の前に出たものののだが、誰もみな「誠の妲己と心得。狐と知るものなかりけり」。唯一、「雲中子」だけが「照魔鏡」に照らし見て「妲己は狐の變化なり」と知るが、言は用いられず、紂王は「妲己」を寵愛のあまり、さまざま悪逆非道をおこなう。

「姜皇后」を「数千丈の高樓」から「擲んで投げ落」として死なせる。その父「姜漢楚」を「擲り殺しに」して「其肉を裂て。醢」にする。それを諫める「西伯姬昌」を捕らえて、その子の「伯邑考」を「殺し。其肉を醢に」したのを「父の西伯侯に食はしめ」る。忠臣「梅伯」を、内側に炭火をさかんに熾し外側には油を塗った「唐銅の柱」を抱かせて、殺す。「酒の池。肉の林の庭を造り、男女を赤はだかにして追放」つ。「姜皇后の宮女七十余人」を「悉く裸体にして」「蛇。とかげ。蜈蚣のたぐひ。毒虫数多を集め置」いた「数千丈の穴」へ「打

込み」、これを「體ぼんの刑」と名づける。川を渡る人を見て、その人間が「父母盛んなる時」か「父母衰へて生るゝ子」かわかるという妲己の言葉を実証するために、人々の「左右の脛を斬らせ」る。同じく「孕み女の胎内に。ある子」の「男女を察し見る事」ができるというので、「孕み女の腹を割」かせる。

こうした「紂王が非道」と「妲己が暴悪」に対して、「武王」が「太公望を軍師として」兵を起こし、紂王が「遂に。煙の内にて死」をとげた時、妲己は「一陣の風を起し。飛び去」ろうとするとところを「殷郊」に捕えられる。武王と太公望はさっそく首を刎ねさせようとするが、「妲己がみめよきに心引かされ。刀を当てんとして打兼ね」ているので、その「太刀取」を斬り、「其後二三人」に代わらせるが「皆々妲己が。麗はしき姿に見惚れて」、誰も首を刎ねる者がいなかった。そこで

殷郊怒って躍りいで。鉞をとって。妲己が首を二つに斬割り。づたづたにさいなみしが。怪しや妲己が屍より。一道の白氣立昇り。金毛九尾の狐と顯はれ。こうこうと鳴きて。西を望んで飛去りけり

さて場面変わって、舞台は「天竺」。「閼舎儀」夫婦が「南天竺華陽山」にのぼり「祈請して子を祈る」ところに、「東の方より。金毛九尾の狐。飛び来り」、「我れは唐土。殷の国の夫人妲己なり。汝が腹を借りて。此国に生れん」と言うや「妻が口へ飛入る」と、そこで「夢さめ」たが、妻は懷妊して「一人の女子」を生んだ。一方、「南天竺天羅国の皇子斑足太子」は父王の後を継いで「斑足大王」となり、一日、「華陽山に狩り」したとき山中で「二八ばかりの麗はしき女」を見つける。その女の「美目よきになづみて」、斑足大王は彼女を宮中に連れ帰り「華陽夫人と名づけて。寵愛限りな」いが、じつは「是れ則ち金毛九尾の狐」なのであった。

華陽夫人は「佛道を嫌ひ、誦誦の声を聞」くと、そのたびごとに「悶絶して病ひ起れ」ば、斑足大王は寵愛のあまり、年来の厚い仏道信仰とはうってかわって「経文を焼捨て。仏像を微塵に碎き」捨てる。さらに華陽夫人の発案で「千人の僧」を裸にして「大きな堂」に入れ、そこへ「美目よき女五百人を入れ、さまざまに戯ふれさせ」ると、じつに「老若の僧ども耻を忘れ。現を抜かして狼藉に及」ぶ。けしからぬ「悪僧」というので、「一里四方の矢来」の中にそれらの僧を入れ、そこへ「数十

匹の獅子」を放ち、あたかも「叫喚地獄の苦しみ」が目の前にくりひろげられるのを、「斑足大王華陽夫人諸共に。高樓に登り」そこから眺めて「手を打って笑ひ樂」しむ。それらを諫め、仏道信仰の厚い后「才妃」を、華陽夫人は「矢にて射殺」す。華陽夫人は、庭の太木に后を縛りつけて、「眼あるゆゑ、佛を敬」うというので、まず「右の眼」、ついで「左の眼」を射抜き、「耳あるゆゑ、佛法を聞取る」というので「左右の耳」を射抜き、才妃が「身を悶へて泣き苦む」その「泣き声を止めよ」というので「口中を貫」いて、才妃を「後ろの太木へ縫ひつけ」るのである。かくて「隣国の諸王を初め。臣下は云ふに及ばず。少しにても忠心ある者をば。悉く殺し」たあげく、いまは「釈迦如来の再来にて。仏道の行者」と評判の「浄玻璃国の美妙王」の「首を刎ね」ようとするところに、「西天より。金色の光りきらめき」、また「紫の雲たなび」いて「三尊光明を放ち。出現」する。

不思議なるかな此時華陽夫人。あな苦しやと。一と声叫ぶよと見へしが。黒髪乱れて針の如く逆立ち。芙蓉の毗日月の如く光り。丹花の唇耳の根まで裂けて。金毛九尾の狐と変じ。再び此土に。来るまじと

叫びしが。東の方へ飛び去りけり

次いで「日域」にあって、「人皇七十四代鳥羽の院」の「寵愛甚だ深い」「玉藻の前」の物語が続くのだが、その大要はこの項のはじめにふれたので、今はこれ以上の物語の紹介はひかえよう。

さきにも言うように、三馬の『玉藻前三国伝記』は女子小児に覚えやすいように事の「起りを大略して」記すと述べていた。物語を紹介するのに『玉藻前三国伝記』をとりあげたのは、その点を理由とするからにはかならないが、このことは言うまでもなく、すでに女子小児を享受層にふくめた玉藻前についての物語世界が先行して成立していたことを前提にしている。いづれ触れることにするが、さかのばれば『史記』殷本紀や『国語』などにいたる中国の古典にまで今は話題を広げる必要はない。はやく謡曲に『殺生石』があり、いわゆる室町物語に分類されるものに『玉藻前物語』をはじめとする一連の作品がある。本稿があつかう物語世界の概略として紹介してきた『玉藻前三国伝記』は、それらに始まる物語の系譜のなかで、三馬流にその「大略」を記したものである。

芳年の錦絵に菊葉亭露光が記した「梵国の半俗太姫華陽」の事跡は、『玉藻前三国伝記』では「南天竺天羅国の斑足太子」と「華陽夫人」のさまざまな悪行として肉付けされたエピソードになっている。仏道を嫌い三宝の敵対者としての華陽夫人とは、かつて殷の妲己の「身体に入替り」紂王と殷王朝を滅亡させた「金毛九尾の狐」の変化であり、その「華陽夫人」という名は出生に関わり、同時に、斑足太子が彼女を見出した場所「華陽山」に因むもののようである。

しかし、『玉藻前物語』をはじめとする一連の室町物語に分類される作品、たとえば室町時代物語大成第九巻は承応二年（一六五三）刊の『玉藻の草子』までを収めているが、すなわちおよそ十七世紀前半までの玉藻前についての説話においては、じつは「華陽夫人」は名前すら登場してこないのである。たとえば謡曲『殺生石』では

今は何をか包むべき。天竺にては斑足太子の塚の
神、大唐にては幽王の後褒姒と現じ、わが朝にては
鳥羽の院の、玉藻の前とはなりたるなり

と、「野干」は自らの本性を玄翁和尚に語る。また『玉藻前物語』をはじめとする一連の室町物語にあっては玉藻前の正体および那須野の狐の由来は、共通しておよそこんなふう述べている。

天羅国の斑足太子は外道羅刹の教えによって、千人の王の首を切つて塚の神に祭り、みずからその位につくことを念願した。九百九十九人まできて、残る王一人、そこで北へ行くこと一万里のところに普明王を捕える。普明王が最期の暇乞いに三宝を頂礼し、沙門を供養する一日の猶予を願うので、斑足太子はそれを許す。普明王は僧の偈に四大十二因縁の旨をさとり法眼空を得、斑足太子もまた諸法皆空の道理を聴聞して、たちまちに悪心をひるがえす。その斑足太子が祭ろうとしたところの塚の神こそ、いま八百歳を経、長さ七尋、尾二つのこの那須野の狐であり、この狐、生々世々、仏法を敵として仏法繁昌の国に化現して、王の命を奪い、みずから国王となることを誓ったもので、玉藻前とはその化現（所変）である、と。

この『玉藻前物語』に代表される斑足太子についての物語は、基本的にはすではやく『曾我物語』巻七に見え、十五世紀前半の説話集『三国伝記』にも記されている。

る。

『玉藻前物語』も『曾我物語』巻七も、ともに本文中に「にんわうきやう」すなわち「仁王経」の名を挙げて、『仁王般若波羅蜜経』巻下護国品第五に基づく同内容の説話を展開している。

それに対して『三国伝記』巻第二第七「斑足王欲千王殺事」は、なにゆえに斑足王が千人の王を殺そうとするに至ったか、その経緯に触れることで、斑足というキャラクターにデモニッシュな陰翳を刻んでいる。それによれば、斑足は「獅子ノ産子ナル故ニ血肉ヲ好ミ食」すこと、あるとき料理人が「新タニ死セル小児」の肉を供して以来、その「殊ニ美」味なるを好むこと、それゆえに頻発する小児殺しに対し「千ノ小国ノ王」が兵を挙げ「斑足王ヲ囚ヘテ耆闍崛山ノ中ニ流置」いたので、斑足王は昔聞いた「陀羅師の説」を今こそ実行して「千王ノ頸ヲ切りテ山神ニ祭」ることにした、というのである。

こちらは『賢愚経』巻第十一無惱指鬘品第四十五に典拠を持っている。すなわち『賢愚経』当該箇所によれば、「波羅捺」国の国王「波羅摩達」が「野獅子」の「婬意」に従った結果生まれ、その印として「足に斑駁（まだらのぶち）」あるゆえに「迦摩沙波陀」の「字」をもつた

が「斑足」であり、「駁足」とも記されている。便宜上ここでは「斑足」の標記に統一して進めることにして、『賢愚經』に見える物語の概要を紹介しよう。

斑足は常日ごろ、山中に住する「仙人」を厚く「供養」していたが、食事時になると「飛來」する仙人はけっして「餽饌（くしん）」を食わず、きわめて「蠱供（粗末な食事）」を求めた。ある日、仙人がやって来ないのを知った「天神」が「化して其の形と作り（なりかわって）」やって来て、斑足王に対して「肉魚」のない粗餐に文句を言い、「今自り已後蠱供を設くる莫かれ、但だ肉をのみ食と為せ」と言いおいて帰ったので、翌日、斑足王が「種種の諸肉」を用意して供したところ、本物の仙人は激しく怒り「王をして是後十二年中恒に人肉を食せしめん」という言葉を残して、山中に飛び帰った。以後、斑足王は最初こそ料理人の窮余の処置であった「死せる小児の肥白なるが地に在」るのを供せられて以来、その「美常に倍す」るのを喜び、それからは料理人に命じて小児を「密かに捕え」ては「人を殺して食と為す」ようになった。やがて料理人が捕えられ、人々に王の悪行が明らかになったとき、斑足王は今後の改心を条件に追放されるよう請うが、人々が死以外を許さないの

を知って、斑足王は修めた善行、王としての治績、仙人を供養してきたことなど自分のこれまでのすべての徳行がめぐりめぐって「今日我をして飛行羅刹に変成するを得しめよ」と言い終わるや、はたして「飛行羅刹」と化して「虚空に飛び」去った。以後、斑足王は復讐として人々の「愛する所の妻兒」をつぎつぎに「食と為し」、多くの羅刹を従えたが、彼らが「一千」の王をとらえ「宴會」をしようと言うのにしたがって「已に九百九十九王を得て、残り一人」となった。そのとき、捕われている王たちは一計を案じて、斑足王に「須陀素弥」を捕らえさせることにする。須陀素弥なら「大方便」で自分たちを救ってくれるだろうと考えたのである。容易にさらってきた斑足王は「愁憂悲泣」する須陀素弥にむかつて、「名徳殊勝第一」の誉れある者なら「大丈夫の志、当に窮達（きうたつ）に任すべ」きに、何をそんなに嘆くのかと尋ねる。須陀素弥は身を惜しむのではなく「生来未だ曾て妄語せざるを念」い、ここで死ぬことになれば、今朝さらわれる前に、後刻布施しようと「波羅門」に言った約束を果たせず、「妄語して誠信を遺失する」ことになるのを憂うばかりである、だから「我に仮すこと七日、彼の道士に施し、当に歸りて死に就くべし」と猶予を請う

のであった。斑足王はそんな言葉信じないが、たとえ戻って来ないにしても、また捕まえるのは容易なことだといふので、須陀素弥を放してやる。須陀素弥は国に戻り、言葉どおり布施をし、波羅門が偈を説くのを聞いて「義理を思惟し、歎喜無量」、このままここに残るようひきとめる人々に「夫れ人世に生まれ、誠信を本と為す、虚妄苟くも存するは、情の未だ許さざる所、寧ろ信に就き死せん」の言葉を残して、斑足王のもとに約束どおり帰っていった。斑足王は須陀素弥が以前より「顔色怡悦」として戻ってきたのを不審に思い、その理由を話さう請うので、そこで須陀素弥がさきに聞いた偈を教え説法したところ、斑足もたちまちに改心して王たちをすべて解放し国に帰した。

こうして物語をたどりなおしてみると、「斑足」という名前がどのようなイメージで迎えられたものか、容易に想像することができよう。カンニバリズムのための小児殺しは、たんに千人の王を殺そうとすることに加えて、斑足太子の非道を増幅するものではある。が、しかし経典までさかのぼったとしてもいづれの場合においても、その非道へ斑足を誘う因由としての「華陽夫人」は登場しない。これは、どういうことか。

『玉藻前物語』が代表する物語内容を便宜上、玉藻前説話と呼ぶことにして、ここで従前の玉藻前説話とたとえば『玉藻前三国伝記』との間にはどのような差異があったのか、それを整理することで、問題としていることが何であるのかを確認しておこう。どちらの場合も、天竺・唐土・本朝の三国を物語の舞台とすること、そして物語はその三国につきつぎと渡来して災厄をもたらす一匹の狐に収斂すること、においては、すなわち物語の基本的な枠組においては共通する。しかし、それを本朝の鳥羽院に配するに玉藻前というように具体的に男女の組として述べた場合、唐土はカッブル名が記されるが、では、天竺はどうだったか。『玉藻前三国伝記』が斑足王に華陽夫人を組み合わせるのに対して、『玉藻前物語』には見てきたように斑足王と対になる女性が登場しないのであった。もっとも、詳しくはあとで述べたいが、おなじ十五世紀半ばに成立した『下学集』が斑足王にふれて例外的に「其ノ夫人」と記していることを考慮に入れば、玉藻前説話には共通して、斑足王と対になる名づけられた女性存在が見えないのである。成立からして『三国伝記』とおそらく時代感覚を共有するであろう『玉藻前物語』にとって、天竺・唐土・本朝の三国が揃

うことでその様式的欲求は満足させられたのに対して、『玉藻前三国伝記』にいたる江戸の形式感覚にとって、それは一つだけの欠如であるだけにかえて非常に均衡に欠けると意識され、そもそものが仮構された玉藻前に加うるに「華陽夫人」という存在は必須の虚構だったと見ることが出来るだろう。すなわち、広い意味で言って典拠を持つ悪逆非道の王にそれぞれ対となる女性を配すること、そうした趣向によって江戸の形式感覚が安定するのだとすれば、『玉藻前物語』に見られるように言わば典拠に忠実に、斑足王が祭ろうとした「塚の神」を「狐」に連絡することによってようやく三国に一貫する物語世界たり得ていた玉藻前説話は、「華陽夫人」としての発見をまっしてはじめて江戸の小説として成立していく。そしてその成立こそが、じつは『玉藻前三国伝記』には前提されているのである。

江戸の形式感覚とか江戸の小説としてとかと杜撰な言い方を繰り返しているが、承応二年に『玉藻の草子』が刊行されて以降、玉藻前説話は内容的に室町物語としての享受がなされたまま、生産性がきわめて低かった。その後、たとえば享保元年（一七一六）に紀海音が『殺生石』を書き、宝暦元年（一七五一）に浪岡橘平ほかによ

る『玉藻前曦袂』が書かれたのを数えるくらいで、しかもそのふたつの浄瑠璃には、いま問題とする華陽夫人はむろん姿を見せはしない。すなわち、『玉藻前三国伝記』にはすでに見られ、また幕末に芳年をして「華陽夫人」を描かしめるだけの、物語受容の転換がどこかでなされなければならなかった。

その画期をなす作品こそ『絵本三国妖婦伝』ならびに『絵本玉藻譚』の二作品にほかならない。すなわち玉藻前説話は、そこに名実ともに「華陽夫人」を組込むことによって、空間としては三国を舞台とし、内容としてはそれぞれの王権の危機的状況を描き、人物としては王を非道に誘うそれぞれの絶世の美女を物語り、しかも金毛九尾の狐の化身という論理は個別のエピソードを一つに束ねて、いわば三国妖婦譚としての安定した体裁と内実を整備するのである。実際、享和三年（一八〇三）および文化二年（一八〇五）に両作品が刊行されるや、それまでの低調とうってかわり、玉藻前説話は文化年中には毎年のように書替え作品が刊行され、三馬の『玉藻前三国伝記』もその一つだったわけであるが、それは文政から天保年間にも引き継がれることによって、幕末における芳年画「華陽夫人」の土壌となつてゆくのである。

(二)

『繪本三國妖婦伝』は高井蘭山作・蹄齋北馬画、上・中・下三編各五卷五冊、それぞれ享和三年（一八〇三）、文化元年（一八〇四）、文化二年（一八〇五）に江戸で刊行された。一方、『繪本玉藻譚』は岡田玉山作・画、五卷五冊、上方で文化二年の刊行である。この江戸と上方で踵を接するように刊行された両書のいわくについては、はやく中村幸彦「読本展回史の一齣」⁴の指摘するところである。すなわち、『繪本玉藻譚』は岡田玉山作・画を標榜しているが、実際は序文を寄せた篠崎三島その「三島門の奇人武内確齋」の作とすべきこと、また「文化乙丑のとし後の葉月」というから文化二年八月の日付をもつ作者の「後語」によれば、稿はすでに「寛政丁巳のとし」すなわち寛政九年（一七九七）には完成していたが、他書の撰述にかかって校正を後回しにしているうちに、江戸で「三國妖婦傳とかいえる繪草紙」が先に刊行されてしまったと述べているのは、両書が基本的に「同じ說話」を素材としていたからであること、そしてむしろ「余りにも相似た蘭山の作品は、上方の計画を察知した

結果と思はれ」る、として、「東西書肆の読本の新様式をめぐっての激しい対立の様子を示す十分の例」を中村はここに見たのであった。

『繪本玉藻譚』は第一巻巻頭口絵に殷姐己・華陽夫人・玉藻前・白面金毛九尾之老狐を描き、いわば全体のラインアップを示している。それぞれの巻は巻頭に「画図目録」、本文の章題目録ではなくすなわち本文に挿入された挿絵の目録を挙げていて、物語内容を画図標題（そして、むろんその挿絵自体）でたどるべく促しており、その第三巻部分が華陽夫人の物語にあてられている。その画図目録を本文の章題と対応させて示せば、つぎのとおりである。

画図目録

（本文章題）

斑足王得花陽夫人

天羅国王之夫人孕獅子兒

斑足太子怪力

斑足王令驅獅子喰僧

斑足王華陽山獲美人

頻沙耆有感夢中

華陽夫人與酒肉墮僧徒

驅狻猊令食僧

華陽夫人射采姫

花陽夫人射采姫

斑足王獵淨波離國

斑足王獵淨波離國

斑足王看華陽夫人疾

普明王趣京

花陽夫人現本形飛去天竺

斑足王征屬國

斑足王以捷凱陣京師（屬國俘及首級至京）

阿弥陀仏来迎

老狐露本形去東天

斑足王登靈鷲山

靈鷲之山

これを見れば、すでに三馬の『玉藻前三国伝記』によって概略を紹介してあるので、物語のおおよその見当はつこう。と言うより、実際は『玉藻前三国伝記』の叙述は、基本的に『繪本玉藻譚』をダイジェストするものであった。詳細な例証はいまは省略するしかないが、固有名詞の表記に関して文字遣いの相違はあるものの、た

たとえば華陽夫人が金毛九尾の狐の正体を現すところ、さきに『玉藻前三国伝記』の本文を引用しておいたが（四六頁）、その文章はまさに『繪本玉藻譚』当該個所にはば同一なのである。

南天竺の天羅國の王子斑足は、獅子にさらわれた后が「獅子の種を胎し」て生んだ子である。王位を譲受けて「花陽山」に狩した斑足王がそこで見出した「容顔美麗にあたりも輝くばかり」の「二八ばかりの女」こそ、「花陽山にて得たれば」というので「花陽夫人」と呼ばれて、寵愛を一身に受けるが、彼女もまた、花陽山に詣でて申子を祈請する頻沙耆夫婦が、ある夜の夢に「我は殷國の夫人妲己也」と名乗る「九尾金毛の狐」が「あなたが胎を借て」と「妻が口中へ飛入」るのを見て、生まれた子である。文字表記が画図目録と本文とで相違しているが、とくに論点とならないかぎり、「華陽夫人」の表記に統一して論を進めることにしたい。

斑足を「天羅國」の王子とするのは『仁王經』だが、その出生を獅子に結びつけるのは、もともと『賢愚經』卷第十一であった。ここでは「波羅捺」の國王「波羅摩達」が狩に出て、疲れてひとり休んでいるところに「駱師子」があらわれ、「欲心を懷くこと盛んにして、行き

て其偶を求むれども、困しみて得ること能はず」にいたのが、王がひとりでいるのを見て、「姪意転た隆ん、欲に王を従はせんと思ひ」、王に近づいて「尾を挙げて」うしろむきにうずくまったので、「其の意を知」った王は「怖れを以っての故に、即ち師子に従ひ、欲事を成し已んぬ」。獅子は「懐胎」し、月満ちて生まれた「形尽く人に似れども、唯足に斑駁」ある子供を、王のもとへくわえて来た、というのである。アジャント石窟の第17窟にはその物語を描いた壁画がある。いま、王宮へ子をくわえてやって来たライオンを前に我が子の認知をする王を描いた部分を挙げておこう（図2）。

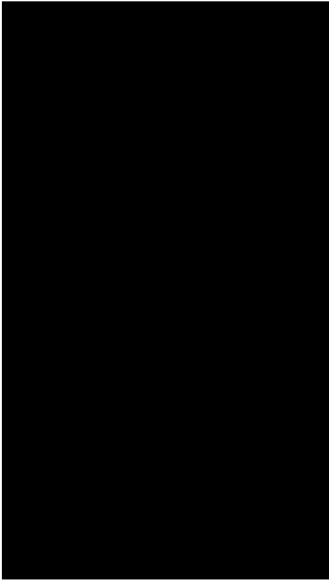


図2

さて、こうした出生の経緯を、斑足王の食人鬼としての非道を獅子が実際に人を食う事実とイメージ上の連合を図ることで合理化するものだ、と解釈したところで何を言ったことにもなるまいが、獅子の種で母の胎から生まれるのと父の種で獅子の胎から生まれるのと、どちらが獅子性を強く意識させるだろうか。生物学的な事実はそもそも問えないのだから、これは家族とか相続をめぐる社会関係の問題としてである。『賢愚経』では、獅子が子どもをくわえて来たとき、王は「自ら前事を憶ひ、是を己が児と知る」からこそ誰が生んだかに関わらずひとりと養育するわけで、そこには父方の血統の意識があらからである。それに対して『繪本玉藻譚』で王が一年ぶりの妃の生還を喜ぶのは当然としても、その失跡中の懐胎による王子出産を手放しで歓迎しているのは、不思議といえは不思議な気もする。が、養子という制度を思い起こすならば、誰の子であるかに関わらず後継をもうけることによって相続されてゆく社会が見えてくる。そして誰の子であるかにこだわらないとすれば、母の胎から生まれる方が獅子の胎から生まれるより、感覚的にもそうであろうように、獅子性は低いということになる。

『賢愚経』にくらべれば出生の経緯において斑足王の獅

子性を低減した『絵本玉藻譚』は、その食人の説話をひきつがなかった。そのかわり、斑足王の仕業として文字どおり人々を獅子に食わせるのである。

さきに例外的に『下学集』が「其ノ夫人」と記していることにふれたが、玉藻前説話にすっかり脱落してしまっている斑足王の「夫人」というファクターを、『下学集』はいったいどこから汲んできたのか。そこに「悪唐人ニ過ギ」とあるのは、すでに物語から帰納された潤色だとして、「夫人」に言い及ぶのは、全くの創作というわけではない。じつは、さきには行論の便宜上、割愛したのだが、『賢愚経』は斑足王に「二夫人」、すなわち一は「王者種」もう一方は「婆羅門種」のふたりの夫人があることを述べて、こんなエピソードを記している。

あるとき王は城外の園観に遊ぶにあたって、自分にしたがって先に到着した者と一日の欲を尽そうと、ふたりの夫人に言った。「梵志種者」すなわち「婆羅門種」の夫人は、途中に「天祠」があったので車を下りて礼拝したために後れをとり、王の寵をそこねた。そこで、この「夫人」は「瞋恚煩悩」、「天神」＝「守天祠神」をげしく怨み、帰館後、王に企んで許しを得て、跡形もないままに「人をして天祠を打壊さしめ」たのであった。かく

て「王宮を傷害せん」と機会をうかがっていた天神は、ある日、斑足が日頃厚く供養する「仙人」になりすまして王の前に現れる。それからさきは、すでに紹介したとおりである。

斑足王がこの「夫人」の容色に惑溺したわけではない。またこの「夫人」が斑足王をそのかしたわけでもない。しかし、斑足王を食人鬼としての非道におとし入れる事態の進行の発端というか契機に、この夫人の「瞋恚」つまり食欲・愚痴とならんで三毒に数えられる煩惱があったこと、またその対象が「天祠」＝「天神」であり、それが斑足王の平生の尊信をむちゃくちゃにしようというなりゆきが、ここには示されている。

華陽夫人は「佛の像を見経の声を聞時は悪心気閉（むねわるくきふさがり）いつにても病を発す」という人物である。斑足王の「三千の寵幸只此一身に止ま」るのを知りながら、あるときは「大王妾を愛し玉ふとならば」とすねてみせ、またあるときはたよりなげに無言の涙に恨みをふくみながら愁訴して、言うのは、「佛像及び経巻を宮外に移す」ことであり、「後宮の后妃」わけても「隔中太子の御母采姫」が女同士の「妬そねみ」から、いやましに仏道精進して「一字の寺を建立し、一千人の

悪僧を集め、金剛秘密の法を修し、呪うて、妾が命を縮めようとしているが、「抑佛法は国に害有て益有事なし」という廃仏毀釈のすすめなのである。「王者種」の「夫人」がここでは太子をもうけた「采姫」に、「天神」に対する「瞋恚」は、女同士の嫉妬にも色づけられて体質と化するまでの佛法へのはげしい憎悪に置きなおされている。相關的に斑足王は「常に佛法を尊信」するのと厚く、そのような太子の仕業として文字どおり獅子に人々を食わせるとしたら、それが根底から平生の尊信を裏切るものとしては、獅子に食われるのは僧に如くはないであろう。華陽夫人は僧の破戒墮落を謀る。「采姫が供養する所の千人の僧」に「酒を進め肉を喰しむ」のは、『賢愚経』に粗餐を旨とする「仙人」に「種種の諸肉」を供して斑足王が決定的な怒りを買ったことを思い起こせばいいだろう。ただしここでは、斑足王の迷妄が華陽夫人への惑溺にはじまるのに見合うかたちで、女色がつけくわえられる。華陽夫人はみずから「艷容たる顔色にこぼるる斗媚を含」んで座に出るのみならず、「宮中の美女五百余人を紅粉を以て面を飾り、身には羅絹（うすもの）の衣唯一重を着せ、脂つきたる白き肌の透通りたるに齋食を持たせ」て供応したから、「老たるも若き僧

も」酒を飲み肉を食べるばかりか「美女をとらへて是を姪し、目も当られぬありさま」を斑足王の目前に呈することになる。斑足王はこれらの「悪僧」を華陽夫人の指喉で獅子に食わせ、その「叫喚地獄の苦しみも是には過じ」とみえる光景を華陽夫人ともども「手を拍て笑ひ楽む」。それは「国中に佛法を禁じ、僧を捕て地中に埋殺し、佛を念ずる者あれば官人庶民の分ちなく悉く獅子の食となし、剩へ其三族を刑」すという、あたかも唐土の焚書坑儒を佛に置換えたような苛政暴虐のはじまりであり、忠言諫言しては「却て花陽夫人が讒言にかかり刑せらるる者少なから」ざるゆえ、誰もみな口を閉ざして「私に国の滅亡を嘆くばかりの王権の末期的退廃と直結している。

浄波離国の普明王をはじめとする「百王」を捕らえてその首を刎ねるのは、斑足王にとっては華陽夫人の病氣を治すことをしか意味しないが、寵愛が斑足王を言いなりにさせる当の華陽夫人にとっては、それは仏教を禁圧することによって王と国の滅亡を決定的にすべき企みであった。なぜなら普明王は「当世の聖にて釈迦佛の再来」とあがめられており、「天竺国は大聖釈迦牟尼佛法を国に建て、慈悲忍辱を以て国を治む」からである。

「一百人の国王を殺し、其首を取て、高山の嶺に埋み、蛇酒を以て山河の鬼を祭る」のでなければ私の命もこれまでですが、「妾一人の爲を以て百王の命に何ぞ換給ふべけんや」と「泪落る事、急雨のごと」く泣きしおれてみせる華陽夫人。それを聞いて、斑足王は「百王は云ふに足ず、千王の首を斬っても、夫人の病癒なんには我何ぞ是を憚ん」と「大きに笑ひ」、さっそく「四方大小の属国百余国」の諸王に上洛の命令を下すのであった。「夫人の病」というのは、さきに普明王と顔を見合わせたたん「普明王の両眼より金色の御光」が発して、華陽夫人が「車より逆に落て悶絶」して以来の不調のことを意味するが、その身から発する光と言えば、すでに玉藻前説話以来、玉藻前が暗夜に身から光を発して周囲を真昼のごとく照らして、その異能を人々におそれられたことを思い出さねばならない。ここはその裏返し趣向になっている。すなわち人ならぬ魔性のせいで光を発したその身を、凡俗を超えた佛性の光が射通すのである。さきまわりして言っておけば、最後のところ、手かせ足かせに自由を奪われた普明王を処刑しようとして誰も斬ることができない場面も同様に、裏返しの趣向になっている。百王がそろったので「花陽夫人が下知として」こ

とごとく手かせ足かせに縛め、「劊子（ひときり）」は首を刎ねるべく刀を抜持つて、斑足王の命令を待つ。華陽夫人はまず普明王を斬らせるよう促し、「劊子」が「斬んとする時忽西天より金色の光り輝きて劊子が持ちし剣段々に折て飛散」り、怒った華陽夫人が「別の劊子に命じて斬しめんと令する所に紫の雲西天にたなびき弥陀の三尊光明を放ち出現」して、普明王をはじめとする諸王は救われるのである。姐己の妖艶さに魅せられて「劊子」は斬ることを忘れ、何人もの「劊子」が逆にみずからの命を失ったのが、姐己最期の場面であった。そこでは殷郊の鉞にようやく姐己の首をずたに切りさいなんだとき、白い煙とともに金毛九尾の狐の本性をあらわして飛び去るのだったが、ここでは普明王を加護する佛性の光が王を救い、華陽夫人は金毛九尾の狐の本性をあらわして飛び去ることになる。

が、それらの小説的潤色もさることながら、そのように佛の加護をさずかる普明王について見ておかなければならない。普明王は上洛の命令がじつはさきの経緯に遺恨をもつ華陽夫人のさしがねで、生還を期することはできないのを知りつつ、斑足王の都へ出立する。因みに、これもまた紂王の命令によって上洛する西伯侯姬昌の設定

と同じである。ひとつには自国が天羅国の属国だからであり、さらにはかりに戦乱になって人々を苦しめることになれば「慈悲の心」にはずれるからであり、なにより「生死の大事は人間の力を以て計り知るべき所にあらず」「しかるべき因縁」だからである。だから、いよいよ首を刎ねられるというので斑足華陽の惡逆不道を口々に怨み罵りさわぐ諸王をなだめて、不道は不道としても「皆因果の然らしむる所」ゆえ心静かに経文の読誦をするよう促すのである。確かに「当世の聖」であり、その忍辱が対比的に斑足王と華陽夫人の惡逆を輪郭づける存在ではある。

しかし、すでに紹介したように、「普明王」の名は『仁王般若波羅蜜經』のほうに見え、そこではいったん捕えられて「一日」の猶予の後にふたたび自ら死地に就くことになっている。ほとんど粗筋というに近い『仁王般若波羅蜜經』に対して、同じ説話でありながら肉付けされたエピソードを展開しているのが『賢愚經』で、ここでは「須陀素弥」の名前で「七日」の猶予になっている。『繪本玉藻譚』が内容的には「須陀素弥」の物語に拠りながらも、それを「普明王」の名のもとに記している点については後述するとして、いずれの説話も斑足王

との約束において死すら辞さない「誠真」(『賢愚經』)を述べて、共通する。すくなくとも『賢愚經』は「生来未だ曾て妄語せ」ざる須陀素弥の婆羅門への誠真をまず記し、ついで偈に導かれた頓悟が斑足王に対する誠真をうみだすことを述べる。だからこそ、さすがの斑足王もその偈を聞く耳を持つわけで、仏教教理に対する賛嘆は須陀素弥の具体的な誠真をとおして示されるようになっていく。したがって、そもそも『賢愚經』が極惡非道きわまりない惡人をも感化する「誠信」のモチーフを持っているのだとしたら、『繪本玉藻譚』はあたかも斑足王の獅子性の低減に比例するかのようになり、普明王の忍辱の緊迫を欠く点で、その誠信を矮小化した嫌いがある、と言わねばならない。

(三)

これまで『賢愚經』に典拠をもとめ、対照するかたちで話を進めてきたが、しかしながら『繪本玉藻譚』はじつは『賢愚經』に直接、取材したというわけではないらしい。「読本展回史の一餉」に言うように、『繪本玉藻譚』に材を提供したものとしては、後藤丹治「三國妖婦

伝について」が『絵本三国妖婦伝』の素材のひとつとして論じた、いわゆる実録的写本『三国悪狐伝』と同じ説話の刊本」である『勸化白狐通』がある。

『勸化白狐通』巻之上・中・下三冊は「明和元甲申歳冬十二月 撰西福原 長傳精舎僧海単潮誌」という序文を持ち、刊記には「明和三丙戌歳 正月吉辰 浪速書林心斎橋南久宝寺町 安井彌兵衛」と記されている。また巻末「浪華書鋪文鶴堂藏版書目録」には「勸化白狐通海警著 三冊」とあり、その作者名は序文末に捺されたふたつの印のうち陽刻印に一致する。⁽⁶⁾「勸化」という語を冠した書名、著者が僧侶らしいことから容易に推測されるように、一七六六年に大坂で刊行されたこの作品は「読本発生に中国白話小説とならんで、大きな影響を及ぼしたものに数えられる「仏教長編説話」⁽⁷⁾のうちの一つなのである。『絵本玉藻譚』の作者について、中村は刊行こそ『絵本三国妖婦伝』に先んじられたものの、寛政九年という時点で「中国小説と仏教長篇説話を合せて新しい長篇読本を企劃」したと述べた。

さて、巻之上のみが第一から第四に分かれるほかは巻之中・下いずれも第三までという中で、華陽夫人の物語は巻之上第三第四、巻之中第一第二に述べられている。

目録を示せば次のとおり。ちなみに『勸化白狐通』は挿絵をいっさい持たない。

巻之上 第三 班足太子誕生

并 花陽夫人ヲ得玉フ吏

第四 花陽夫人采妃ヲ殺害スル吏

并 國中ノ人民及隣國ノ人込生捕リ獅子ニ喰シムル吏

巻之中 第一 花陽夫人奏千王ノ頭ヲ切祭邪神

并 北天竺普明王ヲ生捕リ一旦國ニ帰ル吏

第二 普明王再天羅國ニ来リ法ヲ説千王助

リ玉フ吏
并 班足王菩提心ヲ発シ玉イ花陽野干

ト成飛去ル吏

『勸化白狐通』は本文も「花陽夫人」の表記で通しているので、『勸化白狐通』におけるその人物については「花陽夫人」の表記を用いることとして、まず言うておくべきことは、『勸化白狐通』は本文中に人物名としての言及はあるものの、物語としては玉藻前と花陽夫人に

ついで展開するのみで、基本的に唐土の部分を持っていない、ということである。すなわち示した目録は、玉藻前の調伏を果たした「安倍泰成」が那須野へ飛び去った「野干」の「本性」を帝に奏聞する、いわば泰成物語として花陽夫人のストーリーがたどられるところなのである。そこには頻舎耆夫婦の霊夢という出生のエピソードはないが、斑足王が「花陽山ニ得玉フ故ニ花陽夫人ト名付ケ」るとして、玉藻前説話に斑足王の相手として名づけられた女性が登場することになる。そして泰成物語の最後の部分は『勸化白狐通』という作品が全体としてどういう理念によって構想されたものかを端的に示していると思われるので、いささか長くなるが原文を引用してみよう。改心した斑足王が普明王とともに「靈鷲山」に詣で、一部始終を懺悔するのに対して、「佛」が過現未を語って「因縁」を説く場面である。

汝五生以前ニハ。婆羅門ニシテ。性福祐自在ナリ。
妻ヲ殊妙ト云リ。面目端正ナリ。然レドモ。汝外ニ
妾有テ。深ク愛シテ。妻殊妙ヲ愛セズ。故ニ嫉妬ヲ
抱キ七生ノ間恨ヲナサント。誓ヒテ水ニ入テ死ス。
其一念野干トナリテ。汝カ生ヲ追テ害ス。汝ハ五生

積善ノ因有ツテ。夏ノ槃王ト生ル后妹喜トナリテ。
国ヲホロボシ。又殷ノ紂王ト生ル妲己トナリテ国ヲ
傾ケナヲ善因餘リ有リテ。今天羅國王ト生ル。花陽
夫人トナリ。国ヲ乱リ。王命ヲ害セントス。シカレ
ドモ因縁厚ク無上功德ノ法ニ依テ野干本意ヲ達セズ
立去リヌ。シカレドモ。尚後生二世マデコノ野干離
レズ。汝モコノ法徳ニ依テ。来生周ノ王トナル。野
干宮女ト成テ。国ヲ傾クベシ。〔是幽王ノ褒姒ナリ〕
其後日域ニ生セン。コノ時汝七生満レバ野干モ観音
ノ教化ヲ請テ。畜身ヲ転ジ天上ノ果ヲ得ベシ。汝モ
亦此時大菩提心ヲ発シテ大伽藍ヲ建立シ出家相統シ
テ。西方浄土ニ到ルベシ（伽藍ハ得長寿院ナルベシ
割注）〔鳥羽ノ法皇ノ御叟ト見ヘタリ〕ト説玉フ
る。
「ト旧記ニ見エタレバ」と、泰成が帝に奏聞するのであ

佛が語ると旧記に書いてあると泰成が語るといふ、この三重の入れ子になった語りの体裁は、中心から外側へ次から次へとあふれだしてゆく連鎖とともに、逆に二重三重に圍繞された中心をもイメージさせるといふ点で、内容を構造化していると言えるかもしれない。たしかに

佛が語る斑足王の「今」、その未生以前から泰成が玉藻前調伏を奏する現在に到るまで「汝」の流転輪廻はくりかえされたのだが、しかし佛が語るとおりに進行する、すなわち佛が語る以上のことは何も起こらないのだとしたら、すべては佛が語るときあらかじめ決着しているのである。物語作者は注のかたちで物語を「旧記」の記述に還元している。桀王・紂王・斑足王・幽王・鳥羽法皇、これは言わば世に名高い悪王づくしになっているが、はたして殷のあと周の前に斑足王をならべるのが歴史的に正しいのかどうかともかく、この五生をつくる因として婆羅門の一生があり、また桀王に妹喜が因縁の女であるために妻を持つ一生が必要だから「殊妙」の夫としての一生がもうけられ、あわせて七生。そのうち『勸化白狐通』は具体的には斑足王と鳥羽法皇の部分だけを物語っているのだが、とすると案外、玉藻前説話とは異なって斑足王をこの順序に並べたのには、歴史的に正しいかどうかなどと揶揄するのん気さをひそかにあざ笑う態の構成意志がはたらいているのかもしれない。七生以外には、この流転輪廻を「五生」の語で語ることができるのである。婆羅門まで五生で、悪王づくしが五生、その真中の第三と最後を物語る。そして五生と言えば思いうかべら

れるのは、息苦生・随類生・勝生・増上生・最後生を謂う菩薩の五生として知られる言葉で、鳥羽法皇は確かにこの流転輪廻の最後の生にあてられている。ちなみに中村元『佛教語大辞典』によれば勝生とは容姿・家柄・富貴などの人にすぐれた生まれのことを謂うらしいが、五人の王のすべてが五生のそれぞれに対応するなどと言っているのではない。

しかし、この流転輪廻をおしなべて菩薩の五生のイメージに誘導するかのような措辞につきしたがえば、物語は成道以前の釈迦あるいは釈迦の前生を物語る、いわゆる本生譚、ジャータカ思想をはるか後景に控え持っているのかもしれないのである。本生譚はよく知られているように、最後に〈そのときの彼はすなわちこの私であった〉という意味の語句によって、説話の主人公を仏陀の過去世に繰り込んでゆく。普明王の名前で『勸化白狐通』に示されるエピソードは、仁王経の名を挙げてそれにしたがう偈文を記しつつも、捕われの千王の中で嘆き悲しむこと格別であることなど、内容は『賢愚経』に見える須陀素弥の物語をほとんど忠実にたどっている。そして『賢愚経』はやはり説話の区切り区切りに、たとえばこの場合には「爾時（そのとき）の須陀素弥王を知

らんと欲さば。今我が身是なり。駁足王は。今鸞仇摩羅是なり」という、過去世を現在世に連続させる語句を記しているのである。「今我が身」とある以上、はじまりには「佛王に告げて」の語句が位置している。そして、さきの終わりの語句の直前には、斑足王にかけられた食人の呪縛であるところの「前に仙人の誓い。十二年満つれば。是自り已後。更に人を噉はず」とあって、引用した『勸化白狐通』に「コノ時汝七生満レバ野干モ観音ノ教化ヲ請テ。畜身ヲ軋ジ」云々とあるのに対応する。また、すぐに続けて、では鸞仇摩羅に人々が食い殺されることになったのは何故かと「王」が問うのに、「佛」が答えて始める説話には「波羅捺」国の王「波羅摩達」に二王子あって、ふたりとも「雄才有り、端正殊妙」という語が見える。嫉妬の一念凝って「野干」となり、桀王から鳥羽法皇にまで流転輪廻する夫に執念深くまつわり崇りつづける「妻」の名前であり、その風姿を形容する語である。「旧記」云々とは『賢愚経』を意識した設定らしい。

では『賢愚経』に見出せない話柄は、なにか。花陽夫人が采姫を射殺すエピソードはその代表的なものである。花陽夫人の色香に迷ってとみに仏道懈怠の斑足王を仏道

のほうへ引き戻そうとするというので、花陽夫人はそれを憎んで采姫を殺す。「此眼デ佛ヲ見」「此耳デ法ヲ聞」き「此口デ大王ヲ諫メ」たというので、眼耳口を順にみずから弓で射ぬくのである。

『繪本玉藻譚』は、普明王の名前で須陀素弥の物語を語ることと同様に、この采姫を射殺すエピソードも『勸化白狐通』に負っている。ただ、『勸化白狐通』では、采姫の諫めを内心もっともと思う斑足王が板ばさみになって巡見に出た留守のあいだに射殺することになる。それに對して、『繪本玉藻譚』では、すでに三馬の『玉藻前三国伝記』を紹介して示したように、華陽夫人は諫言に激怒する斑足王の興を増すべく、自らの射術の腕前を誇示するのである。采姫の諫言に激怒する斑足王の反応は、これまた西伯侯姬昌の予言に赫怒する紂王にだぶらせてあるが、こうして二人でいわば采姫をなぶり殺しにすることは、『繪本玉藻譚』では華陽夫人の千僧誘惑からはじまる一連の激しい仏法への敵対行為の帰結として描かれている。そして、『繪本玉藻譚』は『賢愚経』に見られるように斑足王に食人をさせないかわりに、僧侶を獅子の餌食にさせたのだったが、『勸化白狐通』では、それはまた別の花陽夫人の非行として描かれる。す

なわち、斑足王が采姫の供養のために一寺を建立して、千人の僧に金剛秘密の法をおこなわせるのに対して、花陽夫人は酒肉と美女による僧の破戒墮落をはかって、千人の僧は「遠流」に処せられる。だが、導師の善明居士だけは花陽夫人みずから「茶碗ニ肉ヲモリテ」供したところ、「是ヲ見テ大ニ忿リ」すぐさま「靈鷲山」に帰ったとあって、『賢愚経』の仙人が種々の肉の饗応に怒って飛びかえった部分がとりこまれている。僧侶は獅子の餌食にならないわけだが、では、その話題がないのかと言えば、そうではない。破戒僧遠流ののち、花陽夫人はどういうわけか大病を患う。そこで名医の評判高い耆婆の診察を受け、正体を指摘される一段があるが、それは一挿話としてあるだけで、それ以上展開されない。後述する『繪本三国妖婦伝』との大きなちがいである。かわりに、花陽夫人は末期の願いという態で、斑足王にねだるのである、「此国ノ掟ニテ十年ニ一度ツゝ國中ノ罪人ノ死罪ノ者ヲ。獅子ノ食ニ到スヨシ妾イマダ是ヲ見ズ命ノ内ニ見セ玉ハンヤ」と。一も二もなく斑足王はその願いをかなえてやるが、「夫人ハ是ヲ見テ悦ビ勇ミテ夫ヨリモ快氣ニ趣キテ頓テ全快」したので、斑足王はいよいよ花陽夫人を喜ばせるために、「七日ニ一度三日ニ一度」

と頻繁に獅子の餌食とするものだから、「後ニハ罪人尽ケル程ニツミノ輕重ヲ論ゼズ行セルニ尚足ザレバ」はては「国ノ老若貴賤罪ニアラズシテ此（つみ）ニ落入者数シラズ」というありさまを呈することになる。言うまでもなく、『賢愚経』に記される斑足王の食人エピソードの翻案である。

『繪本玉藻譚』は、したがって、『勸化白狐通』には別個のものとして記された采姫殺害と獅子食人という話題をふたつながらひきつぎ、しかし、それらを華陽夫人の仏法に対する憎悪をしめす一連の敵対行為として組換えることによって、一層の仏法蹂躪を表現していることになる。さきに玉藻前における場合の裏返し趣向が普明王との邂逅場面に見られると述べたが、采姫殺害に示される華陽夫人の特技が弓であったのは、自分がふるった力と同じ力によってみずから身を滅ぼすことになる点で、これまた同工と言える。のちに那須野に身をひそめた金毛九尾の狐は、三浦介上総介の弓矢にかかって落命するのである。とすれば、裏返し趣向と呼んできたものは、この物語の文法としては、因果はめぐる小車、すなわち因果応報の論理の表現と見るべきかもしれない。それは華陽夫人の仏法蹂躪と相関的なのである。

(四)

『絵本三国妖婦伝』は、『絵本玉藻譚』と基本的に同じ題材を扱うが、この華陽夫人をめぐる部分は、ストーリー展開をまったく異にしている。それは翻案する際の趣向のちがいと見なされるべきものではなく、典拠そのものの相違に由来する。すでに指摘があるように、写本で通行する『悪狐三国伝』（『三国悪狐伝』とも）上下二巻が、それである。その結果、おなじ斑足王をめぐる華陽夫人の物語といっても、『絵本玉藻譚』が玉藻前説話の延長上に普明王との対峙を描いたのに対して、『絵本三国妖婦伝』では華陽夫人と対決するのは名医蒼婆になっている。『佛説奈女耆婆経』などに、王の子で手に「針葉」を持って生まれてきたので「医王」となるだろうと言われた出生の経緯のとおり、後年、「葉王樹」を駆使した名医ぶりが記されている人物である。

ここでは、斑足は南天竺耶竭国の屯天沙朗大王の太子である。長栄館という楼閣での秋の末の紅葉狩り、斑足太子の玄妙をきわめた箏篋の音にあわせて、はるか向こうの紅葉の森でうたう女の美しい声。召し出された美女

は、「妾は唐土殷の紂王の後宮に仕へし嬪妃」で、武王が殷を亡ぼし紂王は自焚したあと「武王妾を捕へて閨の慰みになさん」とするのを逃れてきたのだ、と身の上を物語る。華陽夫人の登場である。作者は本人に名乗らせるわけでもなく、その意味では注意深く「婦人」と書いているが、一目たちまちとりこになった斑足がその夜「ふかき契りをこめ給ふ」てのち「御寵愛日にまし」と記したあとには、いきなり「華陽夫人と召され」とつづけるのである。すでに直前の上編巻之三に「周の武王殷を伐つて亡ぼす」こと、ならびに「太公望妖狐を斬らしむ」ことを描いて、そのとき悪狐が「是より天竺に渡り」と記したのをうけて、この女性がその後身であることは自明であるとされているからか、なぜ彼女が「華陽夫人」なのか、ここには「華陽山」の名が持ち出されることもない。『悪狐三国伝』には、自ら「我は唐土殷紂王の愛女にて達妃皇后と申者なり」と名乗っているにもかかわらず、「是よりして御寵愛浅からず」なると、「名を花陽婦人と名付」るとあるのに做ったのである。

そのかわりに『絵本三国妖婦伝』は、実在の華陽夫人によってイメージ形成を図る。その美女を「華陽夫人」と書いた直後に、作者は「後世秦の華陽夫人も、此の班

足太子の愛妃の美麗なりしに取って名付けられしと聞こえける」と、草子地ふうの言表で本文に割りこんでくるのである。「秦の華陽夫人」とは誰か。

『史記』 呂不韋列伝は、呂不韋が奇貨おくべしとして子楚と組んで榮達をとげてゆくのを描く。子楚は秦の昭王の太子安国君の庶子で、趙に質子としておかれていたのを、呂不韋は思惑どおり、のちに襲位させて莊襄王とするのに成功することによって、自身もさらなる富貴を手に入れるのである。安国君の後継となるには、およそ有利な材料を何も持たない子楚を、呂不韋がいかにしてその嫡嗣となし得たか。安国君には「愛幸」この上ない正妻があり、しかも彼女には子がいない。そこで呂不韋は「色を以て人に事ふる者は、色衰へて愛弛ぶと、今夫人太子に事へ甚だ愛せられて子無し、此時を以て蚤く自ら諸子中の賢孝なる者に結び、挙げて立てて以て適と為してこれを子とせずや」と、子楚を売りこむ。この夫人こそ名を「華陽夫人」というのである。華陽夫人が「涕泣」して「妾幸いに後宮に充るを得て、不幸に子無し、願ふ子楚を得て、立てて以て適嗣と為し、以て妾の身を託せん」と哀訴すると、安国君は一も二もなく「これを許す」のであった。

この「秦の華陽夫人」を持ち出すことが、どれほど効果的にはたらいっているか、これだけの記述なので心もとない。美麗ゆえに寵愛されて、男を意のままに翻弄する女性、ということだろうが、ひょっとしたら何か誤解でもありはしないかと思わせるくらい、じつは呂不韋列伝のこれに続く部分にはさらに興味深いエピソードが見られる。首尾よく安国君の嫡子におさまった子楚は、呂不韋の子を身ごもっている女を、そうと知らずに夫人とし、生まれた子どもが政、のちの始皇帝である。さきに焚書坑儒を佛に置換えたような斑足と華陽夫人の残虐のことを述べたが、それを描くのは、しかし『絵本玉藻譚』であった。また子楚が莊襄王となって三年で亡くなり、政が王となったあと、この女は呂不韋と私通をつづけ、発覚を恐れた呂不韋が「大陰の人嫪毐」をあてがうや、これと淫して乱倫やまずという毒々しさを示しているのだが、彼女を指す人称は「太后」で、華陽夫人の「華陽太后」、生みの母「夏太后」などとまぎらわしいことはまぎらわしいのである。

こんなことを言うのは、すぐつづく上編卷之五の後半「悪狐花園に眠って傷つく」の部分を思うからである。『絵本三国妖婦伝』は、そもそも華陽夫人の悪行をなん

ら具体的に描写しない。「日夜姪酒に耽り華陽が媚に魂を奪はれ、追々渠が勧むるに随ひ非道の挙動あつく」というような説明が繰り返されるばかりで、どんな「非道の挙動」があるのか記されないのである。そんな中で例外的に具体的なエピソードとなっているのが、「悪狐花園に眠って傷つく」の部分である。九月の菊のさかり斑足太子は花園を巡遊の途中、「籬のうち菊のしげみに狐一疋余念もなく眠って」いるのを見つける。「誠や狐は蘭菊を愛しかくれすむとの古言にたがはず」と、作者は白居易「凶宅詩」に「梟は松桂の枝に鳴き、狐は蘭菊の叢に蔵る」とある一節を斑足太子に言わせて、弓矢で狐を射させる。矢は「狐の額を射剝り」、狐は逃げてしまふが、その夜、華陽夫人を見ると、彼女は「額を帛にて包み」傷をかばっていた、という挿話である。ここでも作者は「此の狐こそ華陽が正体なりしを、心づき給はざるこそ浅ましけれ」と本文に割りこんでくるが、それは『悪狐三国伝』が当該エピソードを記したあとに「評して曰く」として、「惜ひ哉、此時、大王御心付せ給ひなば、後の災ひは無ものを、心付ざりしは全く女に氣を奪われ給ひしゆへ也」と述べているのを、本文に取りこんだものである。したがって、『絵本三国妖婦伝』

は『悪狐三国伝』に従っただけのことかもしれないが、この挿話は、いま白居易の詩を挙げたように、本来は殷の紂王と妲己の物語に組み込まれているはずのもので、なにか混同があるのでなければ意識的な誤用がなされた結果となっている。『絵本玉藻譚』などでは「牡丹叢鵬擲老狐」そして「腮貼香葩蓋疵痕」とある妲己についてのエピソードが、『絵本三国妖婦伝』では華陽夫人の身の上に移し替えられているのである。

さて、華陽夫人が病気になって普婆が診脈することは、『悪狐三国伝』にあるだけではなく、じつは『勸化白狐通』にも記されている。ただ『勸化白狐通』では、それはそれ以上のストーリー展開を見せないまま普明王の物語へと流れ込んでゆくので、そのせいか『絵本玉藻譚』は普婆診脈のことじたいを切り捨てて、物語を構成しようとする意志の一端をのぞかせている。それに対して、『悪狐三国伝』は普明王の物語をいっさい持たず、『絵本三国妖婦伝』はそれを典拠として、華陽夫人の物語を普婆との対決でうめるのである。

普婆は華陽夫人の脈を診断して、その正体を「多分は野狐の類なるべし」と見ぬく。そこで、ひそかに斑足太子にその旨言上し、「御側を遠ざけられて然るべし」と

忠言するが、かえって濡れ衣を着せられる。斑足が菴婆の言を冗談にして伝えたのに対して、華陽夫人はそれを「叶はぬ恋の意趣ばらし」と言い開いたのである。それを聞いて、怒りのあまり誅戮を言う斑足に対し、華陽夫人は「菴婆を召させられ妾と問答する」機会を与えるよう請う。「問答の勝負によって理非明白に罪させ給へ」というわけである。一方、菴婆も診断には自信があるから、その機会を待ち望むが、その日、華陽夫人に「艶書を贈り」云々と、思いもかけず「身にも覚えぬ無実のことをいひかけられ」て、あまりのことに「黙然と」するばかり、まんまとその「艶書の計義」にはめられてしまう。華陽夫人はそもそも「天竺一円魔界となさんと」する宿願にとって、自分の正体を見ぬくほどの菴婆こそ「末々害になるべき」者と見るがゆえに、「論議し言伏せて君に怒りをそへ、殺害せずんばいつか安心なるべき」と考えるから、菴婆の専門である「脈法医論」についても「言伏せ」ようとする。挑発されて、菴婆が「医論」の問答に及ぶと、実際、華陽夫人は「何にても詳に答」えるのであった。菴婆は「茫然として詞なし」。

この問答というスタイル、それによって示される通達しないところのない知識、これらは玉藻前説話における

玉藻前の異人ぶりを表現する類型の踏襲である。『絵本三国妖婦伝』は、意識的に玉藻前説話との連絡をはかっているが、その様相は錯綜している。すなわち、最後に華陽夫人が金毛白面九尾の狐の正体をあらわして飛び去ったあと、以前、華陽夫人を見出した「紅葉の茂みに一塚を築き、かの霊を神に崇めて是を塚の神と称」して祭ったとするのだが、「塚の神」もまた、たとえば『玉藻前物語』に那須野の狐の由来を述べて、「むかし、はんそくたいしの、まつらんとせしところの、つかのみ」とあるのに基づいている。そして、この「塚の神」云々は『悪狐三国伝』には見えない記述なのである。しかし、すでに言うように玉藻前説話では、この「塚の神」は普明王によって破られることになるが、『絵本三国妖婦伝』はその普明王の物語を持たず、かわりに菴婆を活躍させている。

菴婆は「摩竭陀国の天神」に祈誓して、霊夢を得る、「汝国家の為に変化を除き去らん」と願うなら、「金鳳山」に行き、「葉王樹を求むべし」と。なぜ「葉王樹」なのか。それによって「外より内を照らし人の腹蔵を見る」（『佛説奈女菴婆経』）ことができるから菴婆は名医なので、「葉王樹」と菴婆は付物だからだし、そこで「こ

れを変化に見せしむれば正体顯れ、立さる」として、またの名を「移狐樹（やこじゅ）」という語呂合せも意味を持つのである。『悪狐三国伝』はこの件の最後に「評して曰く」として、本来「葉王樹」なるを「此書に野狐樹と書しは狐一件の書なる故かくしるすものなるべし」と述べている。むしろ、なぜ「蒼婆」なのか。蒼婆が葉王樹を手に入れる経緯は、『絵本三国妖婦伝』では、人跡絶えた深山の絶頂に蒼婆がようやく登りつめると、そこに「一つの大樹」があり「杣夫昇りて斧を以て枝をうつ」のを見る、問い尋ねると、「杣夫」は「此我枝伐木こそ移狐樹とも葉王樹とも名付る木なり」とて、「大なる枝を伐つて」落とし「梢を薙すて一尺ばかりに」して蒼婆に与えるのである。これは『悪狐三国伝』が基本的に同じ状況を描いて「大なる所の枝一本」をあたえたと記しているのを、さらに具体的に叙述したものである。礼を述べようと思つて蒼婆が木をふり仰いだときには、その「樵夫」の姿は「行方もなく消失けるこそ不思議なり」と『悪狐三国伝』にある部分、『絵本三国妖婦伝』が「杣夫」の「小瓢の酒」に酌めども尽きぬ「酔を尽」して「目覚て見れば杣夫もあらず」として「天神の冥助」を描くのも、同じことである。そして、それはやは

り『佛説奈女蒼婆経』に由来しているのであろう。『佛説奈女蒼婆経』では「樵を擔ふ」「一小児」に出くわしたところ、「悉く此児の五臟腸胃總悉分明に見ゆ」るので、蒼婆は「本草経」にいう「葉王樹」を思い出して、その子の担った薪の束の中から「一小枝の長さ尺余に裁」たれた葉王樹を見つけ出すことになっている。これを中国ふうの仙界趣味に染めなおしたところだろうか。

しかし、蒼婆の物語がどのような経緯をへて、華陽夫人と結びつくことになるのか、目下のところ、不明と言うほかはない。ただ、「蒼婆経」の逐字訳といつてもよい⁽⁸⁾とされる都賀庭鐘の『通俗医王蒼婆伝』に、蒼婆と狐とを結びつける話があることはある。その「第七回妖狐前知僻蒼婆」が、それである。夜毎に通つてくる狐の化身の美女との交情のせいで、全身の衰弱著しい男を蒼婆が回復させる話だが、男が言うには、蒼婆の到着前にその女が正体を明かして、蒼婆が来たのではやられてしまふので今日かぎりお別れすると帰っていった、というのである。内容上もそうだが、宝暦十三年（一七六三）の刊行、さらにはこの部分が、前記徳田氏に指摘があるところ、例外的に「蒼婆経」の行文を踏まえずに「書

かれていることは、その初めを確認できないものの『悪狐三国伝』の広汎な流布を思いあわせるとき、これが原因なのか結果なのかはにわかに判断し難い。

(五)

さて、冒頭の疑問にもどって、華陽夫人とは誰か、もはや十分あきらかであろう。では、芳年は、その何を描いたことになるのだろうか。苦悶にゆがんで悶絶する男の首であるからには、斑足王に捕われた百王をすぐ思い出す。そのエピソードは『絵本三国妖婦伝』には見えなかったが、『絵本玉藻譚』にはたとえば、百王の首を得るために斑足王が「纔に三月の中に二十余国を切崩し、生捕にせる国王十八人、其余数人は殺して首を都に入る」という本文があって、画図目録に「斑足王以捷凱陣京師」と記されるものの、実際の画には「属国俘及首級至京師」とある挿絵が、その場面を示している(図3)。画面右手前に兵士が大きく描かれ、その槍先にかけられた首がふたと右端の兵士が左手にぶら下げた首がひとつ見える。彼らが向かいつつある左奥に小さく斑足王は坐し、両者のほぼ中間、柱の陰に半身をのぞかせている

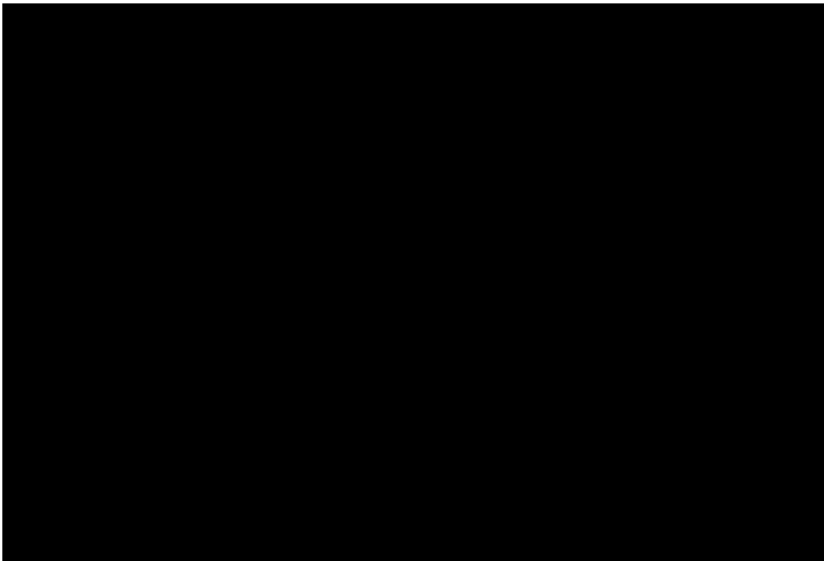


図3

華陽夫人。華陽夫人が裏で画策して斑足王に首を取らせる、すなわち陰にいて斑足王と首をつなぐ者という物語を思い起こせば、その位置は絶妙のポジションと言わなければならない。

しかし、芳年の画と対照すべきは口絵の「華陽夫人」のほうである(図4)。くらべてみれば、その類似は一目瞭然。ただ右手が剣を持つのと指差すのと、左手はその高さが、ちがうくらいのものである。が、それはそれとして、はたして小説のどこにこんな場面があったら

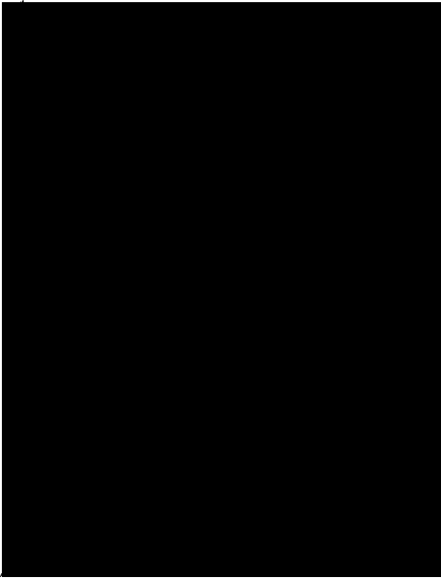


図4

うか。芳年画がこの口絵に依拠したと述べる『和漢百物語』の解説も、『絵本玉藻譚』の「どの部分に相当するか、引用で明示できる箇所は見当たらない」と述べ、ひとつには前述の場面に見当をつけ、さらには「玉山も他に依るところがあったかもしれない」と述べるにとどまる。確かに華陽夫人が実際に自ら剣をふるうことはないばかりか、百王は実際には首を刎ねられることはなかった。しかし、伝承がつねに華陽夫人に結びつけるのは百王の首を刎ねさせようとしたということであり、その企図そのものを実現された現実として描くことはありうることであろう。玉山の口絵に関して言えば、たとえば殷の妲己については、腰から下に羅をまとっただけで上半身はだかの女性が、立膝で後手に庭の柱に縛り付けられ、その首には蛇が巻きついているのを、着飾った妲己が見下している図が描かれている。この女性は、はだかと蛇から言えば蠱盆の刑にされた姜皇后の宮女のひとりのようであるし、一方、腰の線のまるみから言えば腹を裂かれる妊婦のようでもあり、いずれも本文中に描かれた妲己の悪行でありながら、しかしこの画のような場面はどこにも見出すことはできないのである。口絵という性格からしても、ある特定の場面の表現であるよりは、総合

的な印象を集約する、いわばその人物の図像的（アイコングラフィック）な描出が試みられていると見るべきであろう。実際、玉藻前について玉山の口絵は、今は詳細に見る余裕はないが、物語としてのヴァリエーションに係なく殺生石の伝説として玉藻前を描く定型化された様式を踏襲している。姐己や華陽夫人を描くのに、そのような定型化された様式が玉山の前にあつたわけではないだろうが、描き方の意味と方法はないわけではなかった。

芳年は『絵本玉藻譚』の口絵を襲った。『絵本玉藻譚』には初刷本のほか、幕末のころの後刷本、さらに明治版などあって、版を重ねたことが知られている。ただし、上述の違いにくわえて、芳年画では全体に縦長に引伸ばされたうえに、裳の裾にのぞく左右のつま先は視線と逆向きで身体の不自然なまでのねじれをつくっていて、その分、奇妙な浮遊感が全体に漂い、妖しさが増していると言える。百王の首を刎ねることと華陽夫人の名前がむすびついているとき、華陽夫人の悪逆の印象の強さは、剣の有無いずれにあるか。剣を構える図は残虐を事とするのを樂しむ烈しさを伝えるかもしれないが、しかし芳年は剣を描かなかった。本文のどこにもそんな場面はないというので、芳年が剣を省略したわけではあるまい。

悪逆の烈しさではなく、芳年の画は悪逆にふける女性の、惑溺の陶酔を感じさせる。女性の表情をよく見比べれば、激情に顔こわばり眉つり上げんばかり目をいからせた女性に対して、むしろ駭蕩たる温気に眉ゆるみ臉もだるくうっとり眠そうな、と言ってもよいような女性が描かれている。それに目をこらすとき、ほとんど同じ樹木を背後に描いているにもかかわらず、芳年画の「枝を交わす南国風な植物の珍奇な緑色の線形」（『和漢百物語』解説）は、剣を持つ玉山の画が持つことのない、主題を暗示する重要な背景としての自己を主張しはじめるように思われる。すなわち、この華陽夫人は〈犠牲を捧げられた樹の精霊〉かも知れない。

パリー語の『クッダカ・ニカーヤ』は現在、最も多くの本生譚を集成し、独立して『ジャータカ』（五四七話）として知られる部分を含んでいる。いま英訳本『THE JĀTAKA OR STORIES OF THE BUDDHA'S FORMER BIRTHS』（THE PALI TEXT SOCIETY OXFORD 1995）にちよって示せば、『賢愚経』にみえる須陀素弥の物語は、そっぞは『No. 537 MAHA-SUTA-SOMA-JĀTAKA』として記されている。基本的に同内容の物語の中で、これがわたしの注意を引くのは次の

ような部分である。すなわち、食人鬼となった「ベナレスの王」が追放されて、森の中の「バンヤン」の樹の根元に庵をむすぶ。そうして通りがかりの人々をさらっては王は食人をやめることができない。いつものように、ある日バラモンをさらったとき、追手から逃げる途中、「アカシアのとげ」を踏み抜いて足を負傷した。獲物を放り出し、ようやくのことでバンヤンの樹の根元まで逃げ戻った食人鬼の描写は、こんなふうになっている。

食人鬼は自分のバンヤンの樹の根元まで行って、若枝のあいだに横たわり、樹の精霊に祈りを捧げて、言った、「我が女神、樹の妖精よ、もし七日の間にあなたがわたしの傷を癒すことができれば、わたしは全インドの一〇一人の王子の喉からの血でああなたの幹を浸してみせよう、そして樹の周りに彼らのはらわたを吊るし、五種類のうまい肉を生贄に捧げよう」と。

はたして傷が癒えたのを「樹の妖精」の力だと思った食人鬼は、実際に、王子たちをさらってきては、その掌に穴をあけて、彼らをその樹の枝に吊るしたのである。

『賢愚経』に「駁足王は。今齋・仇摩羅是なり」とあったように、この食人の王は「Angulimala」（アングリマール）と記されて、同一の人物である。また「the spirit of the tree」めづは「the tree nymph」は「My lady」と呼びかけられ、女性代名詞で指示される唯一の女性存在である。

一方、芳年の描いた樹木は、そこに見える果実からして、閻浮提という名がそれに因むところの「球形または楕円形で直径数センチ」の実をむすぶジャムブ、和名は「じゃんばらん」であって（岩本裕『日本佛教語辞典』）、バンヤンではないかもしれない。また確かに、首というわけではない。

しかし、『絵本玉藻譚』が描く斑足王の悪行は、すべて歛心を買うべく華陽夫人に捧げられたものであった。王をしてそれほど感溺させる魅力が華陽夫人にあり、けっして専制して自らことをなすのではなく、その意志がすべて男の事業をとおして実現されるタイプの女が描かれているのである。弓で采姫を射殺すのも、興趣を増すべく王が許可したなぐさみとして自分の邪惡な意志を実現するのだから、王の留守中の私刑であってはならなかった。

食人鬼は、樹の精霊に一〇一人の王子の犠牲を誓ったものの、当初は、かつて自分の個人教師だったというのでスタソーマをその数に入れなかった。が、結局、スタソーマを捕えてくるのは、ここにスタソーマを捕えてきて、彼を犠牲に供すればお前は救われるだろうという、樹の精霊みずからのことばに従うからである。『JATAKA』 No. 537 が、スタソーマ本生譚と呼ばれるようにスタソーマの忍辱と結びつくのは、その結果である。ただし、それは自分に犠牲をささげる食人鬼の誤解を解き、これ以上の殺戮を止めさせたいと願った「樹の精霊」の、じつは方便にほかならなかった。Sakkaはスタソーマだけが王子たちと食人鬼そのものを救うことができる「樹の精霊」に教えたのである。すなわち『JATAKA』と『絵本玉藻譚』ではその点、行為において共通し、動機において相反するのに見える。華陽夫人は「誠に聞しに勝る普明王が大徳こそ恐しけれ、此者を殺さずんば、吾思ふ望もむなしかるべし」というので、斑足王にけしかけて、普明王をはじめとする「百王」を捕らえさせたのであったから。しかし、それゆえに捕われた王たちは救われ、華陽夫人は金毛九尾の狐の正体を暴かれて、斑足王が非道から覚めて頓悟したのだから、

これもまたほかならぬ「佛智の大方便」とされるのであった。

『JATAKA』 No. 537 は、樹の精霊がその姿を見せてスタソーマの犠牲を要求したとき、食人鬼が自分の守護神を目の当たりにして大いに喜び、スタソーマのことで思いわずらわれるなど請合って、「もう一度、あなたご自身の樹にお戻りください」と言うや、彼のまさに目の前で精霊が樹に入った、ことを記している。ひょっとしたら、芳年の画の前ではわれわれは、いやおうなしにこの食人鬼の位置に立たされ、彼と同じ視線で華陽夫人を見るようにしむけられているのかも知れない。

捧げられる犠牲に陶醉する女性の画像と言えば、谷崎が『刺青』に描いた二本の巻物がすぐに思い出される。ひとつは、桜の樹に身をもたせかけた若い女が「足下に累累と斃れて居る多くの男たちの屍骸を見つめて」いる「肥料」と題する画幅。もう一つは、「今しも庭前に刑せられんとする犠牲の男を眺めて」いる「古の暴君紂王の寵妃、末喜を描いた絵」。正確には、「紂王の寵妃」なら妲己だし、「末喜」なら暴君は桀王とあるべきところである。この誤りは、したがって、誤りそのものによって倍增された非道の獲得に成功しているとも言える。道徳

的判斷を捨象した、その唯美の志向を描いて見せるのに、谷崎は周到にも「愚」と云ふ貴い徳」を人々が「まだ」持っていた時代を設定した。芳年をときに最後の浮世絵師と呼ぶのは、そういう「愚」という徳につながる画風に対する褒詞でもありうるのかもしれない。

注

- (1) "The Bizarre Imagery of YOSHITOSHI — The Herbert R. Cole Collection" by Roger Keyes, George Kuwayama
- (2) 大正新脩大蔵経第八卷般若部四。『仁王護国般若波羅蜜多經』卷下護国品第五との異同あり。
- (3) 大正新脩大蔵経第四卷本緣部一。
- (4) 昭和三十三年十月「国語国文」27-10、『近世小説史の研究』所収。
- (5) NHK出版『アジャント壁画』（高田修 監修・著、大村次郷 写真）による。
- (6) テキストは国文学研究資料館所蔵マイクロフィルム中村幸彦蔵本。
- (7) 中村幸彦「読本発生に関する諸問題」昭和二十三年九月「国語国文」17-6、『近世小説史の研究』所収。
- (8) 徳田武「佛説奈女菩薩經」と『通俗医王菩薩伝』、『日本近世小説と中国小説』所収。
- (9) But the man-eater, going to the foot of his

(10)

banyan tree, lay down amongst the shoots and offered up a prayer to the spirit of the tree, saying, "My lady, nymph of the tree, if within seven days thou canst heal my wound, I will bathe thy trunk with blood from the throats of one hundred and one princes from all India, and will hang the tree all round with their inwards and offer up a sacrifice of the five sweet kinds of flesh." (Book XXI, p. 257)

Be bold and captive here great Sutasoma bring
And by his sacrifice shalt thou win heaven, O king.

With such words the nymph put off her disguise as an ascetic and stood revealed in her own form, blazing in the sky like the sun. The man-eater hearing what she had to say and beholding her form asked who she was, and on her replying that she had come to life as the spirit of this tree, he was delighted and thinking, "I have looked upon my tutelary divinity," he said, "O heavenly sovereign, be not troubled by reason of Sutasoma, [476] but enter once more into thine own tree." The spirit entered into the tree before his very eyes. (Book XXI, p. 258)

付記

本稿は、筆者が一九九九年四月からの一年間、追手門学院大学海外研修規定による滞英研修中に執筆したものに、帰国後、一部手を入れたものである。すなわち、アジャント石窟壁画について、同僚のインド哲学の正信公章教授に

示教を得た。その他、滞英中さまざまにお世話になった方々に厚くお礼申し上げたい。

なお、『三國妖婦譚の世界・その二』は、すでに追手門学院大学文学部紀要第36号（二〇〇〇年十二月）に掲載したので、あわせてお読みいただければ幸いである。